

青嵐（あおあらし）とは、「初夏の木々の葉をゆすって吹くやや強い風」、「青々とした山の気」などの意味がある言葉です。逗葉高校を吹き抜けるさわやかな風と、生徒の皆さんのたくましさをイメージしました。第10回は、天馬行空 です。

逗葉高校の皆さん、ゴールデンウィークははるか彼方、中間テストも終わり、気が付けば、もう体育祭が間近です。本当に時間の経つのが早い！ でも、時の流れは誰に対しても平等なはずなので、「速いと感じるのはそれだけ充実していたから！」ということですね(たぶん)。

ところで、5月10日から16日までの一週間は、「愛鳥週間(バードウィーク)」でした。鳥といえば、英語の授業で習う「If I were a bird, I would fly to you.」という仮定法過去の有名な例文を思い出すように、望むままに大空を飛んでいける、自由の象徴のようなイメージがあります。

私たち人類は、プロペラや翼、エンジンなどを持った飛行機を作り、世界を巡ることができるようになりましたが、鳥類の飛翔の自在さにはまだまだ及びません。

ほとんどの鳥類は、長い進化の過程で、飛ぶために特化した形態になりました。

前肢を飛行翼とし、軽量の骨格と非常に発達した大胸筋、短い消化管など、飛行のための様々な仕組みを備えています。大きさも形態も多様な鳥類は、自重に打ち勝つために、羽ばたくだけでなく、上昇気流を利用したり助走をつけたり、それぞれのやり方で舞い上がり、翼をコントロールすることで自在に空を飛翔します。

翼の後方にある風切羽は、羽ばたく時にはプロペラのように推進力を生み、前に進みながら風を受けることで揚力(上向きに働く力=浮き上がらせる力のこと)を発生させ、滑空時には文字どおりの翼となって揚力を増して安定した飛行を可能にしています。また、羽の一枚一枚は、形のない空気を確実に受け止める抵抗性と、受け流す柔軟性とを合わせ持つと同時に、抜群の保温性も備えており、体温の低下を防いでいます。完璧です！

でも、そんな鳥にとっても飛翔する事は、非常にエネルギーの要る、大変な作業です。駅前や公園にいるハトなどを見ていると、ギリギリまで飛ばずに済まそうとしているように見えませんか？天敵のいない孤島などには、飛べない鳥類が進化していることから、飛ぶことの大変さがうかがわれます。

鳥類は、その持てる能力を駆使し、目に見えず形もない空気を利用することで、飛翔しています。私たち人類が飛翔する鳥に憧れたり、感動さえ覚えたりする理由は、その自由な姿がうらやましいからというだけでなく、その一生懸命さに、まるでアスリートを応援するような感情を持つからかもしれません。ひたむきに生きているものに対する共感です。

私たちに現実の翼はありません。でも、誰でも心に翼を持つことはできます。心の翼は、私たちが広い世界へと連れて行くことのできる、可能性の翼です。

ただし、ただ翼があるというだけでは飛べません。飾りではなく、機能するものとして

翼を使ったときに、はじめて自由な飛翔が可能になります。そのためには自分の持つ翼を常にチェックして、機能の向上を目指して手入れをし、現実の鳥が空気を相手にそうしているように、周囲の様々な状況を、翼で受け止めたり受け流したり、さまざまに動かせるように訓練しなければなりません。そして、皆さんにはそれができます。

皆さんにとって、心の翼を精いっぱい使って鳥のように大空を渡って行くことは、仮定法過去ではなく現在進行形や未来形です。

最後に、「天馬行空（てんばこうくう）」という四字熟語を紹介します(やっと、タイトルが出てきたぞ)。天馬とは空を飛べる馬のことです。その天馬が、さえぎるもののない空を自由に翔る。その様子から、「考え方や行動が自由なこと」や、「文章や筆運びに勢いがあること」などの意味があります。また、周りに気兼ねせずに思いのままに行動するか、常識などに縛られない行動をするという意味に使われるときもあるようです。

さすがに、傍若無人な振る舞いというのでは困りますが、天馬がその翼で、脚で、風をつかみ、空を蹴るイメージは、優雅さと力強さとを兼ね備えていて、私はこの言葉が好きです。

幼いころは、妖精さんが「三つの願いを叶えてあげる」と言ってくれたら、1 番目には「ペガサスに変身したい」と言う決めていたほど、天馬に憧れていました。そして今も、もしも妖精さんが叶えてくれるなら、一つ目の願いは、実は変更なしだったりします。

皆さんも、よく晴れた大空を天馬となって翔る自分の姿を思い浮かべてみてください。それだけでも、ちょっといい気持ちになったりしませんか？

平成 29 年 5 月 23 日
校長 大貫 晶子